26P-pm235

理礼氏薬物学（第十五巻）にみる薬物

◯小松　直登[1], 西野　ゆり[2], 林　優樹[3], 西野　正雄[4], 菰田　彩佳[5], 宮本　如奈[6], 高倉　弘士[7], 畠山　有理[8], 島　和嗣[9], 久保　光平[10], 畠山　貴博[11], 大垣　旭[12], 小松　知貴[12], 澤田　采佳[13], 木村　壮太郎[14], 畠山　光弘[15]（[1]府立東住吉高校, [2]府立長野高校, [3]府立富田林高校, [4]早稲田大学(基幹理工), [5]関西福祉科学大学, [6]同志社大学(文), [7]立命館大学(産業社会), [8]長崎大学(薬), [9]府立金剛高校, [10]四天王寺羽曳ヶ丘高校, [11]初芝富田林高校, [12]府立河南高校, [13]府立西浦高校, [14]府立藤井寺高校, [15]畠山獣医科）

「はじめに」・・明治五年に刊行された理礼氏薬物学は、アメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第十五巻全文を解読し紹介する。

「内容」・・巻十五巻では去痰薬、通経薬、催津薬そして噴嚏薬を扱っている。去痰薬としては、　海葱（海葱酢、海葱糖煉、複方海葱糖煉 etc）、遠志（遠志煎、遠志糖煉 etc）、舛麻（舛麻流動エキス）、大蒜（大蒜糖煉、葱）、安息香（安息酸、複方安息香チンキ etc）、百露ナルサム、篤露バルサム（篤露チンキ、篤露糖煉）、蘇合香が紹介されている。通経薬は、子宮の機能を奮発催進し、月経を健全な状態に戻す薬であり、経閉の原因は頗る多いため一つの薬で全てに適用できるものはないとした上で、サビナ（サビナ油 etc）、芸香、茜根、綿草根、アピオルが紹介されている。

　また、催津薬とは唾液の分泌を促進する薬品であり、その最も重要なものは水銀であるが、この作用を目的に目に影響を与えることはない。ここでいう催津薬は、分泌脈管に局用して、能く分泌管に作用する。普通、これを咀嚼するため咀嚼薬という。しかし、その作用は非常に狭いので医薬として使用するのは希である。時々歯痛に良効を表すと説明している。ピレトリュムのみが示されている。さらに噴嚏薬については鼻孔に吹入し、その粘膜に作用し分泌促進するとして、アンモニア、煙草、泥炭鉱、白黎蘆、サルビアなどと名称だけが紹介されている。

「考察」・・江戸時代シーボルトが伝えた通経薬には、護謨安没尼加，アツサハシタ，アンケリカ，カルバヌム,ムーデル，メンター，メラ，サフラン，カストレウム，ホウ砂，ゴム，アンチモニア，マステキス，エーゼル，ドウ砂，琥珀等があるが、その多くが含まれていない。

キーワード：理礼氏十五巻、去痰薬、通経薬、催津薬、噴嚏薬